

## H25年度 中間評価・革新的研究調査（FS）評価（案）一覧表

## 【ソフト分野・中間評価】

(H24採択・2年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	H25委託額 (千円)	中間評価 (案)*
24-1	1	I	研究名	熊本大学 准教授 円山 琢也	10,000	B
			都市圏交通調査・分析・予測手法の先導的プラットフォームの構築と実装			
			概要			
			スマートフォン上のアプリを使用した安価な交通調査を実用化し、平成24年度秋の熊本都市圏PT調査と連動して大規模サンプルで実行し、既存調査手法との比較・分析、高度な交通需要予測手法の実用化を目指す。			
24-2	1	I	研究名	筑波大学 教授 堤 盛人	13,000	A
			道路資本の市町村別ストック推計に関する研究開発			
			概要			
			道路資本のストック額を市町村別に推計するための方法を開発し、日本の全市町村を対象とした推計を行う。また、推計されたデータを用いて道路投資の財務・経済分析を行う。さらに、通常業務における経理処理と電子納品されるデータを用いた道路資産情報管理システムの雛形を提示する。			
24-3	1	II	研究名	東京工業大学 大学院准教授 福田 大輔	14,000	A
			道路の旅行時間信頼性の評価と運用に係る研究開発－経済便益計測手法の提案と経路誘導システムの構築－			
			概要			
			道路の旅行時間信頼性(移動の定時性)が向上したことによる経済便益の計測・評価手法を提案・検証するとともに、旅行時間の不確実性を前提とした経路誘導アルゴリズムの開発とそのシステム構築について研究する。			
24-5	5	II	研究名	埼玉大学 大学院教授 久保田 尚	7,550	C
			歩行者の表情・しぐさを利用した空間評価指標についての研究開発			
			概要			
			歩行者の心理を正確に反映した街路歩行空間の評価手法を確立するため、外部から観察可能な歩行者の笑顔や行動を評価基準とする指標を確立し、その指標を用いて映像解析技術から自動的に指標値を算出するシステムを提案する。			
24-6	6	II	研究名	名古屋大学 大学院教授 中村 英樹	13,000	A
			改良対策立案のための交差点安全性評価シミュレータの研究開発			
			概要			
			本研究開発は、交通安全対策代替案の安全性に関する定量的評価を行うための、交差点安全性評価シミュレータを開発するものである。実測データに基づき、車両と横断歩行者の軌跡・速度の変化、各種判断挙動、およびそれらのばらつきを交差点の幾何構造や制御条件に応じて確率的にモデル化してシミュレータに実装し、コンフリクトの程度を再現することで、ヒヤリハットなどの危険性を空間的に出力可能とする。			

(H25採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	H25委託額 (千円)	中間評価 (案)*
25-1	6	II	研究名	東京大学 教授 家田 仁	14,000	A
			広域道路ネットワークの耐災害信頼性から観たリンクの脆弱度及び改良優先度の実用的評価手法の開発と適用性評価			
			概要			
			社会資本整備において実用的な道路ネットワークの信頼性評価手法に着目し、広域道路ネットワークの耐災害信頼性の観点から、リンクの脆弱度及び改良優先度の評価手法の開発を行う。また、東北地方をはじめとする日本各地の自然災害と空間条件の実情を踏まえた現実的な道路ネットワークの信頼性指標の特性分析に基づいてその適用可能性を評価する。			
25-2	2	III	研究名	京都大学大学院 教授 谷口 栄一	13,000	C
			物流の効率化と環境負荷の低減の両立を目指した道路政策についての研究開発			
			概要			
			大都市における貨物車交通の問題は、経済の発展・環境の改善・省エネルギー・交通安全の観点から非常に重要な問題であり、本研究開発においては、東京や大阪などのメガシティにおいて物流の効率化と環境負荷の低減の両立を目指した道路政策を立案するための貨物車交通マネジメントの方法論について研究を行う。			
25-3	6	I	研究名	東京大学 特任教授 山田 晴利	10,000	B
			事故発生位置情報を用いた事故分析総合システムの研究開発			
			概要			
			これまでの事故データでは、事故発生位置がわかるのは道路管理者がマッチング作業を行って位置情報を付与している一般都道府県道以上の道路での事故のみであり、これ以外の道路の事故発生場所は不明で、場所を特定しての分析はできなかった。2012年から全ての人身事故について発生位置が付与されるようになったので、地理情報システム(GIS)を援用し位置情報の入力支援・品質管理から分析まで網羅できる、わが国初の総合的な全国事故分析システムを研究・開発する。これは事故分析のもっとも基本的な情報基盤であり、細街路、ゾーン30等これまで十分な分析が行えなかった道路、地域を対象とした分析に加えて、ヒヤリ・ハットデータやドライブレコーダのデータとの連携、沿道の建物用途・土地利用形態・道路線形との関連分析を可能とし、「幹線道路と生活道路における事故対策の展開」に寄与する。			

## ※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

【ハード分野・中間評価】

(H24採択・2年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	H25委託額 (千円)	中間評価 (案)*	
24-4	4	II	研究名	大型実験および数値解析による連続アーチカルバート盛土の設計規範の構築に関する研究	京都大学 教授 木村 亮	25,000	A
			概要	プレキャストアーチカルバートを盛土内に連続的に設置する構造物の耐震性能を検討し、その設計規範の構築を目指す。盛土構造の弱点とされていた地域分断や閉塞感を解消し、地域の要望から橋梁を選択しなければならない地点でも盛土構造の導入を可能とし、快適で災害に強い社会資本整備をコスト削減施策の中で進めていくことが可能となる。			
24-7	7	II	研究名	津波に強い道路構造物の研究開発	九州工業大学 教授 幸左 賢二	22,500	B
			概要	東日本大震災により発生した10mを超える巨大津波による道路構造物(橋梁、土構造物)の被害調査を実施し、津波高、津波流速と構造物の被害の関係を定量的に評価する。ついで、実損傷構造物をモデルとした水理模型実験により、構造物に作用する流速や圧力分布を求める。これらの結果を基に、10mを超える津波の橋梁への作用力、抵抗力算出手法を提案する。同様に遠心模型実験により土構造物の被災基準および対策手法を提案する。以上の結果を取りまとめて、道路構造物に対する耐津波設計手法を提案する。			
24-8	8	II	研究名	疲労き裂の補修技術に関する研究開発	名古屋大学 教授 館石 和雄	6,100	B
			概要	本研究では、疲労き裂が生じた鋼橋部材に対して、簡易にかつ即時性をもって補修するための技術開発を行う。具体的には、ICR、樹脂注入法、溶接補修の3つの技術を取り上げ、それぞれの効果と適用限界を定量的に明らかにするとともに、実施工技術を開発する。			
24-9	8	II	研究名	舗装路面の動的たわみ計測装置の開発と健全度評価	東京農業大学 教授 竹内 康	8,700	B
			概要	本研究では、路床の泥濘化や地下埋設物の老朽化・劣化等に伴う舗装路面下の空洞等の構造的欠陥を迅速かつ的確に把握し、舗装の健全度評価を行うことができる走行式の非破壊検査装置である“動的たわみ測定装置”を開発し、実舗装において健全度評価を行うものである。			

(H25採択・1年目)

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	H25委託額 (千円)	中間評価 (案)*	
25-4	4	II	研究名	道路橋示方書の改定を踏まえた性能設計概念に基づく設計照査手法についての研究開発—特に下部構造物を中心として—	岐阜大学 教授 本城 勇介	9,000	B
			概要	道路橋示方書は、H23年度改定に引き続き、数年以内に性能設計概念の徹底と、部分係数法による設計照査を全面的に導入した大幅改定が予定されている。本研究はこの改定に備え、この概念と手法を全面的に取り入れた、道路構造物への要求の高度化と多様化への対応、建設や維持補修のコストの縮減等を目指した設計照査手法を廻る諸問題に、具体的な解を示すことにより、性能設計の導入の効果が速やかに発揮されることを目的としている。			

【ハード分野・革新的研究調査(FS)評価】

番号	領域	タイプ	研究名とその概要	研究代表者	H25委託額 (千円)	FS評価 (案)*	
25-5	4	II	研究名	繊維シートや鋼板によって補強されたRC部材の再劣化に対する健全度評価法の開発	東北大学 教授 鈴木 基行	14,000	A
			概要	経年劣化した道路橋は、補修・補強されて供用が続けられている。本研究は、繊維シートや鋼板補強によって表面が覆われ、再劣化による変状が目視確認できない桁や床版などのRC部材に対して、非破壊検査法と健全度評価法を開発する。			

※中間評価：研究継続の妥当性評価

A: 現行のとおり推進	研究は順調に実施されており、現行のとおり推進することによって十分な研究目的が達成される見込みである。
B: 現行のとおり推進 (指摘事項有り)	研究は順調に実施されているものの、十分な研究目的を達成するためには、評価者からの指摘事項に留意の上、推進することが必要である。
C: 研究計画を修正の上推進	このままでは十分な研究目的の達成が期待できないと思われるので、評価者からの指摘事項を踏まえ、研究計画を修正の上、推進することが必要である。
D: 中止	現在までの進捗状況に鑑み、研究目的の達成が困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。

※FS評価：研究継続の妥当性評価

A: 新規研究として採択	実現性は十分あると評価する。よって、次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
B: 新規研究として採択 (指摘事項有り)	実現性はあると評価するが、研究目標を十分達成するためには、評価者からの指摘事項に留意が必要。次年度から新規研究として採択し、引き続き研究を継続する。
D: 不採択	実現性はほとんどなく、研究目標を達成することは困難と思われるので、研究を中止することが妥当と判断される。